様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成２７年　６月２０日現在

機関番号：３２６８５
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３７２０１２０

研究課題名（和文）幕末国学者の出版と文学活動―城戸千楯（京都書林恵比須屋市右衛門）の研究

研究課題名（英文）Kido Chitate: Publishing and Literature of the Japanologist in the 19th Century

研究代表者
青山　英正（Aoyama, Hidemasa）

明星大学・人文学部・准教授

研究者番号：１０５１３８１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：　近世後期から幕末にかけての日本では、交通網の整備に伴って全国的な人的ネットワークが形成され、また詠歌や学芸活動が出版というものと深く結びついた。
　本研究ではそのような時代を象徴する人物として、国学者本居宣長の京都における門人グループの中心人物であり、かつ書肆の経営者として多くの書籍の出版に携わった城戸千楯（1778-1845）に着目し、彼の学芸と出版活動を、人的ネットワークの観点から明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In the 19th Century Japan, a nationwide network of the people was build accompanying the transportation network. Also, scholarship and the arts joined hands with publishing.
 This study focused on Kido Chitate(1778-1845), not only the key figure in the group of the disciples of Moto-ori Norinaga but the publisher and bookseller in Kyoto. Then I investigated his achievements in scholarship and publishing from the perspective of the network of the people.

研究分野：日本近世文学

キーワード：国学　本居宣長　出版　商業　京都

１．研究開始当初の背景

（１）本居宣長以降の国学は、これまで宣長の歌学的側面を継承した歌文派が、復古思想的側面を継承した古道派に駆逐されてゆくという構図の中で理解されてきた。そのため、思想史研究では古道派の代表としての平田篤胤およびその一門がもっぱら注目され、文学研究においても城戸千楯らの活動は歌会中心の平凡なものであったと見なされてきた。

（２）上記の理由により、千楯自身の事績や彼の書肆としての活動の意義についても、具体的にはほとんど明らかにされてこなかった。

（３）近世後期の文化については、これまで江戸を中心に研究が進められ、近世後期から幕末にかけての京都文壇、とりわけ千楯が深い交流を持った狂歌壇についての研究はほぼ皆無であった。

２．研究の目的

（１）これまで思想史中心に研究されてきた本居宣長以降の国学を、城戸千楯という人物を軸に人的交流や出版という観点から捉え直す。

（２）近世後期の書肆の活動を、文化的側面のみならず経営的側面も含めて解明する。

３．研究の方法

（１）宣長門人としての千楯の事績を、人的交流という観点から再評価する。

①京都黒谷金戒光明寺の城戸家墓碑、同寺西住院に所蔵される過去帳『ゑびす屋嶋田一統霊名簿』、そして京都の町方文書や三井文庫所蔵史料などの調査をおこない、千楯を始めとする城戸家の人々の生没年や家族関係を明らかにする。

②現存する書籍や、これまで未紹介だった近江大津の狂歌師伊東颯々宛城戸千楯書簡38通（個人蔵）を翻刻して年代や固有名詞を特定して注釈と解題を付すなどの調査を通じ、千楯と上方の文壇、狂歌壇の関係を明らかにし、併せて千楯の学芸活動の具体的様相を明らかにする。

③城戸家の本家である島田八郎左衛門関係資料を調査し、歴代の島田家当主やその別家である大路家などをあわせた恵比須屋一統の文化活動を明らかにし、そこに城戸家の文化活動や出版事業を位置づける。

（２）書肆としての城戸市右衛門家の活動を実証的に明らかにする。

①城戸市右衛門が出版や売り広めに関与した書籍、また、千楯が主宰した学芸サークル「鐸舎（ぬてのや）」から出版した書籍の悉皆調査を行い、書肆として活動した時期や出版点数の推移、出版分野の傾向などを明らかにする。

②城戸市右衛門の顧客であった伊勢商人川喜田久太夫家宛て城戸市右衛門書簡を調査し、書肆城戸市右衛門が実際にどのような業務を行い、顧客に対してどのように対応していたのかを具体的に明らかにする。

（３）上記（１）（２）を通じて、近世後期から幕末にかけての上方における、国学や和学に関する人的交流と出版活動について明らかにする。

４．研究成果

（１）城戸市右衛門家が独立して一家を構えたのは、寛政2年である。そして、書肆としての活動を開始したのは、初代市右衛門が寛政12年に没し、二代市右衛門すなわち千楯がそれを嗣いだ前後であった。その後、天保3年に三代千屯に市右衛門名義を譲り、また鐸舎の名義も天保14年頃大橋長広に譲った。千楯が弘化2年に没した後、店はやがて千屯の代の元治元年頃に閉じた。

　城戸市右衛門家に関するこのような基礎的事実が、過去帳の記述と出版書目の悉皆

調査、伊東颯々宛書簡、出版書の奥付に記載されている所在地などを照らし合わせることによって明らかになった。

（2）城戸市右衛門の出版・売弘書目 157 点と、千楯主宰の鐸舎が蔵板ないし製本した書目 13 点を悉皆調査し、印の前後や出版記録なども検討して版権の移動の様相を明らかにした。

その結果、城戸市右衛門は学者同士の人脈を活用して、和学書を中心に蘭学書までをも手がけ、その開板や京都における売り広めを担った書肆であること、寛政期以降幕末にかけて、全国的に増大した和学書の需要に応える形で、本居宣長や平田篤胤ほど分厚い門人層を持たない和学者の著作や、地方社中の蔵板書などの板行・売り広めを手がけ、和学普及の一翼を担った書肆であることなどが見えてきた。

なお、千屯の代になってから出版点数は減少傾向であり、文久頃には板権を次々と売却している。よって、千屯の代になってから出版活動そのものは振るわなくなったと考えられる。しかし、川喜田家宛の千屯書簡を調査した結果、千屯は書籍販売に優れた手腕を見せていることもわかった。書肆としての活動は出版点数のみで評価すべきでなく、出版と販売という両側面から今後考えてゆかねばなるまい。

（3）伊東颯々宛千楯書簡や城戸家過去帳の調査から、城戸家が京都の豪商島田八郎左衛門家の別家であること、また八代島田八郎左衛門が、千楯が序文を寄せた『狂歌百鬼夜興』（文政 12 年序刊）の編者である狂歌師菊廼舎真恵美その人であることが明らかになった。

そこで、島田八郎左衛門家関係の資料を調査した。島田八郎左衛門は、近世前期から近代初期にかけての京都を拠点として、三都で呉服商、両替商などを幅広く営んだ豪商である。この島田家からは、本草書『花彙』草之巻一・二（宝暦 9 年刊）を編纂した充房や、先述の狂歌師菊廼舎真恵美らが出た。真恵美は、周忠という名で本居大平門人名簿にも掲載されている。

また、島田家の別家には城戸家のほか、書肆長松堂大路次郎右衛門を営んだ大路延貞や千楯門人の長松清風こと本門仏立講開祖日扇らが輩出した大路家がある。

千楯の学芸活動と出版活動は、この島田家およびその一統の存在を背景に考えることにより、いっそう鮮明に浮かび上がる。

まず資金面から考えれば、鐸舎の出版物にはほとんど広範な読者を見込んでいないと思われる『諸社奉納歌集』といったものがある。そこには周忠の名も見られることから、おそらく島田家からの資金提供があったものと推測される。

また、前述の島田充房『花彙』の出版は、島田家の財力のほか、物産会の流行と香川修庵門下のネットワークなどがその背景にあったと考えられるが、千楯や、彼が主宰した鐸舎のメンバーは、本草家小野蘭山門の水野皓山など以文会の面々と交流があった。

さらに、伊東颯々宛千楯書簡の調査などから、千楯が、京都や近江を始めとする四方側（鹿都部真顔門）狂歌壇の人々との交流が深かったことが明らかになり、実際、鐸舎が出版した書籍にも、彼ら狂歌師の名前が見られる。そして、菊廼舎真恵美はまさにその上方四方側狂歌壇の中心人物の一人にほかならなかった。

つまり、千楯や彼が率いる鐸舎の文雅の活動は、島田家一統が培った物産学関係の人脈と、狂歌壇の人脈との中で営まれていたことになる。

（4）千楯と鐸舎については、これまで平田篤胤に対抗心を燃やす保守的勢力と見な

されてその限界がもっぱら指摘されてきたが、上記（1）～（3）を踏まえ、千楯と鐸舎の事績を次のように再評価することが出来る。

まず、千楯らは、物産学のような京都の商人、職人層が培ってきた学問的風土をその土壌とし、師系にとらわれないゆるやかな学問的交流の中で、考証的な学問手法や儒教・仏教とも折り合っていこうとする現実主義的な姿勢を有していた。そして、その範囲内で宣長学を受容し、京都という地の利と出版というメディアを活用しながら、天保期以降、メンバーに狂歌師や地方の商人、職人などを加え、近世後期から幕末にかけての交通網の整備に伴って国学と狂歌といったジャンルを超えたそのネットワークを拡大していったが、その活動には豪商島田家が陰に陽に関わっていた。

こうした意味において、千楯とその周辺の人々の活動は、富裕商人による国学受容の一典型例であると言え、主に農民層に支持された平田篤胤を相対化するためにも、今後さらに詳細に検討する価値のある人物であると結論づけられる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

1．青山英正、恵比須屋島田八郎左衛門家の人々――『花彙』の編者島田充房を中心に、明星大学人文学部日本文化学科紀要、査読無、第 23 号、2015、pp.211-229

2．青山英正、恵比須屋市右衛門出版・売弘書目稿（附鐸舎蔵板・製本書目）、書物・出版と社会変容、査読無、第 14 号、2013、pp.1-66。http://hdl.handle.net/10086/25567

3．青山英正、伊東颯々宛城戸千楯書簡三十八通――翻刻と解題、明星大学人文学部日本文化学科紀要、査読無、第 20 号、2012、pp57-97。http://id.nii.ac.jp/1225/00000487/

〔学会発表〕（計 3 件）

1．青山英正、恵比須屋島田家と京都鈴門、第 32 回鈴屋学会大会、2015、三重県松阪市、本居宣長記念館。

2．青山英正、城戸千楯（恵比須屋市右衛門）の交友と出版、第 3 回人的交流研究会、2013、愛知県西尾市、岩瀬文庫。

3．青山英正、城戸千楯（京都書林恵比須屋市右衛門）の出版と文学活動、第 78 回書物・出版と社会変容研究会、2012、東京都国立市、一橋大学。

６．研究組織

(1)研究代表者

青山　英正（Aoyama Hidemasa ）
明星大学　人文学部　准教授
研究者番号：10513814